

祭魚洞

4

渋沢敬三からのメッセージ

渋沢敬三の 夢みた世界

拾われたアーカイブズ—公文書拾遺

「祭魚洞文庫旧蔵水産史料」には、廃棄された公文書が多く存在する。その収集について宮本常一は、「(敬三は)多くの人々が見落としているもの、見落としている社会に注目した。水産史や塩業史の調査に力をそそぎ、資料蒐集に全力をあげたのもそのためであり」主として官庁などで廃棄される紙屑の中から拾いあげた資料がきわめて多かった。とくに水産関係の資料は、紙屑の中から見出したのが半ばをしめたといってもよかった。官庁で忘却の彼方へ押しやろうとしているものの中に、民衆の側から見れば忘れてはならないものが多数含まれており、しかもその中に将来を予見する価値のあるものが少なくなかった」と懐述している。

企画展では、拾い集められた全容を見ていただくため、簿冊をまとめて展示した。農商務省「(製塩井ノ粕因解)」には、東日本大震災で甚大な被害を受けた三陸沿岸の製塩に関する記述があり、失われた過去を知る希少な資料となった。公文書が地域の人々の記録であることを如実に語っている。[参考文献:加藤幸治「武蔵保谷村だより」(第10号、2013年)、宮本常一「著作集50渋沢敬三」(未来社、2008年)]

アチックミュージアムから 国立民族学博物館へ

アチックミュージアムは、渋沢敬三が主宰した博物館兼研究所である。大正初年頃、渋沢が友人らと東京・三田にあった自邸の一隅の屋根裏部屋に玩具などを収集したことに端を発する。昭和初年には、邸内の独立した建物に民具を収集し、若い同人を集め、民具や民俗学・民族学の研究を行い、1935(昭和10)年前後から日本水産史の史料収集と研究も行うようになった。

1935(昭和10)年、敬三は白鳥庫吉らと日本民族学会を設立し、国立民族博物館構想を政府に陳情するも戦局の悪化からこれが叶わず、1937(昭和12)年、高橋文太郎とともに建設した日本民族学会附属研究所・附属民族学博物館に、アチックミュージアムに収蔵されていた二万点を超える民具標本類を移転させて日本民族学会にそれらを寄贈した。しかし、運営・維持することは難しく、また、自らの死期を悟った敬三は、1962(昭和37)年、その資料を文部省史料館へと寄贈し、将来に国立民族学博物館が設立された時には、これらの資料を移管することを言いおいた。

1962(昭和37)年から1975(昭和50)年の13年間、大阪の国立民族学博物館が設立されるまで、資料は品川区戸越の文部省史料館の北館に収蔵された。

1975(昭和50)年1月4日、深夜の東名高速道路を一路西にむかう一群のトラックがあった。名神高速道路を経て万博公園の外周道路に入ったトラックは、公園の一角にあった倉庫で積み荷をおろした。

文部省史料館に保管されていたアチックミュージアム資料が、当館から大阪の国立民族学博物館におくられたのである。以後16日までに4回にかけて運ばれた資料は、トラック延べ20台分のほった。

渋沢敬三の“DNA”の継承

半世紀以上の紆余曲折を経て、ようやく民博に安住のすみかを得たこれらの資料は、1977(昭和52)年に公開された民博東アジア展示の「日本の文化」の過半数を占めたという。実博資料もアチック資料も、そのコレクション保存・公開施設の設立に向けた模索が続けられたが、最終的には渋沢敬三自身が設立に尽力した文部省史料館と国立民族学博物館の収蔵と帰し、人間文化研究機構にまとまることになったのである。

ここでは、本来なら民博に移管されるべきところであるが、当館にある資料を紹介しておきたい。豪華な染付の大漁着物(「万祝着」)がある。漁師たちの晴着で、大漁祝などに着るもので保存状態もよく貴重である。タグにアチック資料であることが記されている。

夢のスカンセンミュージアム回遊

1925(大正14)年夏、敬三29歳の時、横浜正金銀行でのロンドン支店勤務を終え、前年に初めて訪れたスウェーデン、ストックホルムのスカンセン野外博物館=オープンエアミュージアム、オープンフィールドミュージアムでの強烈な印象を胸に、「日本にもスカンセンのような」との思いを携えて帰国する。

1896(明治29)年、建物を移築するだけではなく、当時の衣装を着た人を配置し、空間も用具もそそえた生活そのものを体験できる博物館が開館した。それがスカンセンミュージアムである。

スカンセン野外博物館の記憶をよみがえらせた敬三は、1936(昭和11)年、日本民族博物館の設立を計画する。1937(昭和12)年、アチックミュージアムの同人である高橋文太郎が、武蔵保谷(現:西東京市)の土地を日本民族学会に提供すると、敬三はさらに土地を購入し、今和次郎に設計を委ねて、武蔵野の民家などを移築した。

今回の展示では、その夢を具体的に表現するため、現代版“回遊展示”も企画した。

展示開催の記録

2013年9月13日(金)～10月14日(月)

渋沢敬三が構想した日本実業史博物館(略称:実博)における「渋沢青淵翁記念室」資料のデータベース構築による成果を基に、渋沢史料館との連携研究を実施し、渋沢栄一の「青淵翁記念室」を復元した展示を試みた。

さらに、渋沢敬三が夢みた“昭和の正倉院”に収められたであろう静岡県漁村の「内浦史料」、祭魚洞文庫「旧台湾」史料、実博資料(絵画、地図、写真、番付、文書・書籍、器物)など、当館所蔵品を一堂に展示した。また、敬三が抱いていた“回遊展示”構想を表現した企画もあわせてご覧いただく機会となった。

- 展示の概要
- 1 イントロダクション: 渋沢敬三からのメッセージ
 - 2 渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元
 - 2-1: 「御所用品目録・御取藏品目録」のすべて
 - 2-2: 「青淵」とは—遺愛の品々—
 - 2-3: 「竜門社」とは—語り記録された栄一の思想—
 - 3 渋沢敬三の夢みた世界
 - 3-1: 「昭和の正倉院」に託して—文部省史料館と日本実業史博物館
 - 3-2: 祭魚洞の漁民資料への思い—江戸城への鯛上納と武蔵野の人々
 - 3-3: 拾われたアーカイブズ—公文書拾遺
 - 3-4: アチックミュージアムから国立民族学博物館へ
 - 4 夢のスカンセンミュージアム回遊
 - 4-1: こもれびの里と石井家の古文書と民具
- 5 むすびにかえて:
[参考資料:「史料館の歩み40年」・「史料館の歩み50年」(1991・2001年、国文学研究資料館史料館刊)、『渋沢敬三著作集』(第1～5巻、1992～1993年、平凡社刊)]

渋沢敬三記念事業公式サイト 「渋沢敬三アーカイブ—生涯、著作、資料—」 (<http://shibusawakeizo.jp/>)

2003年11月に設置された実業史研究情報センターは、青淵翁記念日本実業史博物館構想を現代的な形で実現することを目的とし、豊富な参照手段を備えたデジタル・ライブラリーの構築を目指した活動を行っている。
渋沢敬三の没後から50年にあたる2013年、渋沢敬三記念事業としてシンポジウム・講演会・企画展などの多くの渋沢敬三記念事業をセンターが軸となって企画している。

日本実業史博物館コレクションの利用案内

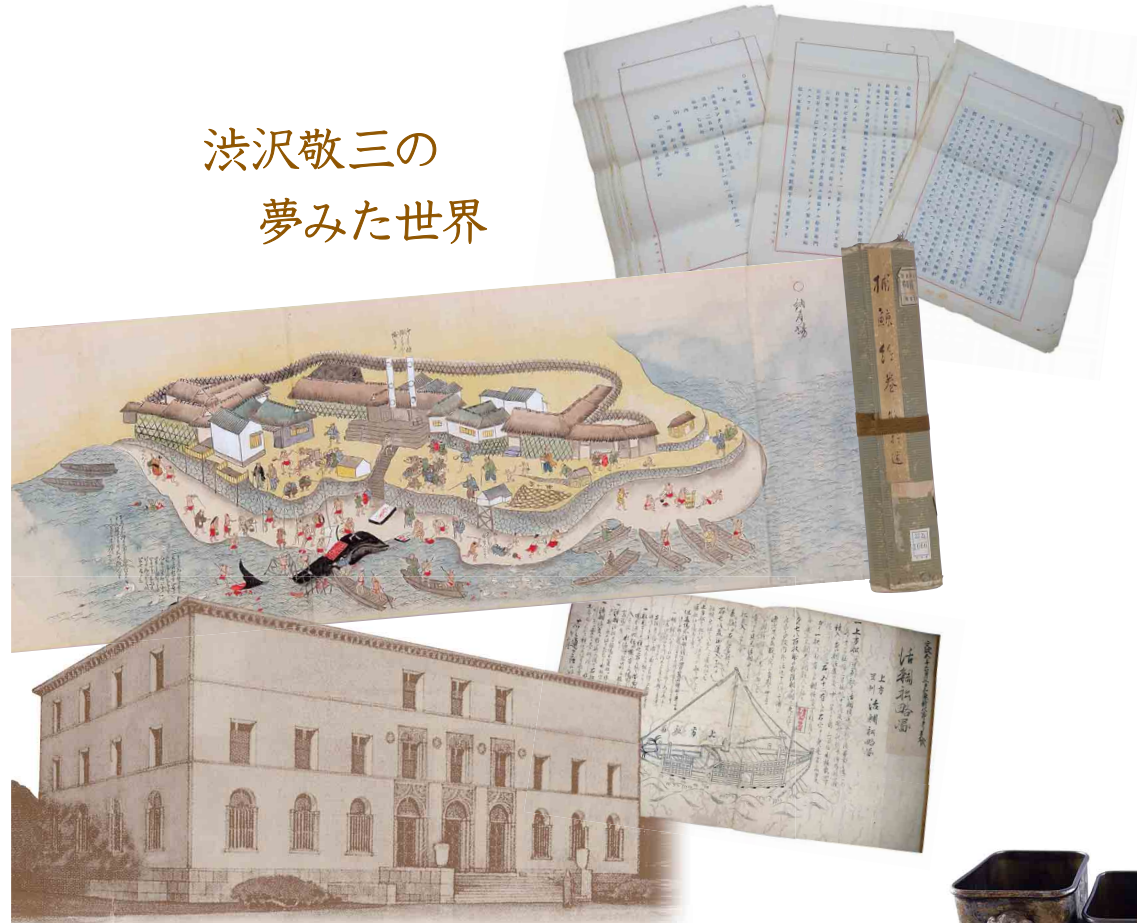
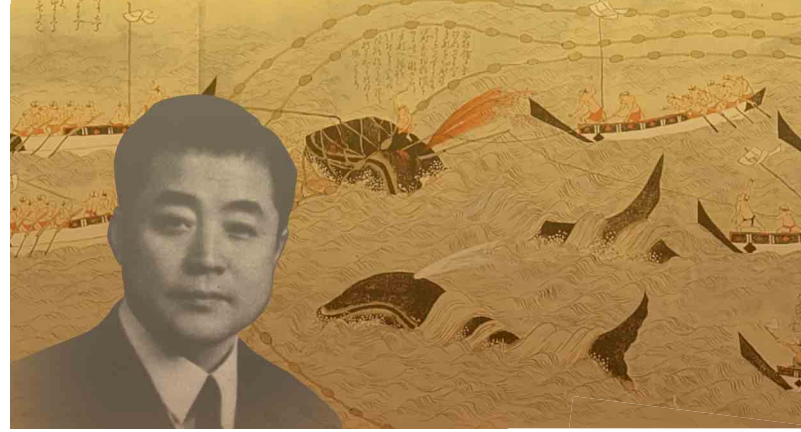
資料利用の時間は、9:30～18:00。史料・貴重書の閲覧は9:30～17:30です。土曜も開館しておりますが、時間など異なりますので、HPでご確認ください。ここで紹介した「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」の利用については、事前に学術情報課情報サービス係歴史資料担当まで電話(050-5533-2930)・メール(jouetu@nijl.ac.jp)にお問い合わせください。
●実博資料は、ホームページ(<http://www.nijl.ac.jp/>)から「電子資料館」→「日本実業史博物館コレクション」の画像データベースでご覧ください。

「渋沢敬三記念事業」 “渋沢敬三没後50年展示企画「復元 渋沢青淵翁記念室」に関する研究”成果報告パンフレット

編者 青木 睦(国文学研究資料館)
「渋沢敬三記念事業」渋沢敬三没後50年展示企画
「復元 渋沢青淵翁記念室」に関する研究”研究代表
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館
〒190-0014東京都立川市緑町10-3
TEL050-5533-2900(代)

発行 「渋沢敬三記念事業」・国文学研究資料館 2013年00月00日(実納品日)

編集印刷 株式会社丹青研究所/株式会社博秀工芸



日本実業史博物館完成予想図(渋沢史料館蔵)



今和次郎コレクション「スカンセン鳥籠図」(工学院大学図書館所蔵)

渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元



“渋沢敬三没後50年展示企画「復元 渋沢青淵翁記念室」に関する研究”成果報告

「渋沢敬三からのメッセージ」展の概要

「渋沢敬三からのメッセージ」展は、2009年から財団法人MRAハウスが助成している「渋沢敬三記念事業」における研究プロジェクト研究成果公開の一環としての企画展示である。折しも2013年は、祖父渋沢栄一の懇望に従って実業の世界に身を投じ、戦時・戦後には日本銀行総裁、大蔵大臣などの公職を歴任、日本経済の大変革期に立ち会い、日本の民俗学・民族学を発展させて文化事業に大きな足跡を残した渋沢敬三(1896-1963)の没後50年にあたる。

没後50年に際しての「渋沢敬三記念事業」には、当館とともに国立民族学博物館も加わり、特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」(2013年9月19日～12月3日)を開催した。渋沢敬三自身が保存・公開施設の設立に向けて尽力したコレクションが一堂に展示公開され、多彩な顔を持つ渋沢敬三の優れた功績を伝える機会となった。

当館には、渋沢敬三によるコレクション資料「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」が所蔵されている。1931(昭和6)年11月11日に渋沢栄一が死去した後、現在の北区飛鳥山公園内にある敷地と建物が渋沢記念財団竜門社に寄贈された。竜門社は、この旧渋沢栄一郎の利用に関する委員会を設置し、1937(昭和12)年7月15日、「渋沢青淵翁記念実業博物館」(青淵は栄一の雅号)の建設を決議した。この決議は、委員の一人であった渋沢敬三による近世経済史博物館の建設構想「一つの提案」をベースにしたもので、これにより資料の収集・保存・管理および博物館建設計画が敬三の手に委ねられた。1939(昭和14)年5月13日の渋沢栄一誕生百年記念祭には博物館建設地鎮祭が挙行されたが、折りからの戦争による社会の激変により竣工には至らなかった。その後も「日本実業史博物館」の名称で資料の収集および展示・収蔵のための施設設置場所の模索が続けられたが、実現には至らずに終わった。まさに「幻の博物館」となった。

日本実業史博物館構想が断念された後、その準備室が収集したさまざまな資料は、1951(昭和26)年に文部省史料館(国文学研究資料館史料館の前身)に一括寄託された。そして、渋沢敬三が没する前年の1962(昭和37)年、正式に寄贈となり現在に至った。

この企画展示では、日本実業史博物館(略称:実博)の一角を占める予定であった「青淵翁記念室」に関する資料データベース構築の成果をもとに、渋沢史料館との研究連携を行い、「青淵翁記念室」の復元を試みた。また、渋沢敬三が抱いていた“回遊展示”構想を具体的に表現するため、国営昭和記念公園内のこもれびの里に移築された旧石井家住宅(立川市指定文化財)の展示や、立川市役所内の多目的プラザに設けられた企画展「立川の古民家～小林家住宅と石井家住宅～」(企画:立川市歴史民俗資料館)などと連携した、現代版“回遊展示”も企画した。

渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元

前述した「渋沢青淵翁記念実業博物館」建設の決議に際し、敬三は、「折角お爺さんの為に財界の人達が御考え下さっていることは大変有難いことであるが、それならばそれを敷衍した経済史的な博物館を、渋沢家も御手伝ってつくりたい」として、「渋沢青淵翁記念室」「近世経済史展観室」「肖像室」の3室からなる「青淵翁記念日本実業博物館」(近世経済史

博物館、のち実博)構想を提唱し、栄一の遺品を中心とした「渋沢青淵翁記念室」のための資料収集にあたった。祖父栄一の傍らにある時、その後ろ姿は、「しっかりとした偉人というよりは、むしろ侘びしい一個の郷土血洗島の農夫の姿」であったといい、その「農夫」の姿を、孫である自身に投影したのかも知れない。

この展示は、「一見つまらぬ様な事でも、ありのままに出来得る限り集めて置かねばならぬ」として遺されたコレクションを通じて、敬三が描こうとした栄一の実像に少しでも迫っていただければと願う企画であった。

「青淵翁記念室」とは

日本実業史博物館で第一に衆目すべきは青淵翁記念室であり、渋沢栄一その人のすべてを表現する。1937(昭和12)年の展示室構想では次のようにまとめられている。

「青淵翁の一代を遺品、写真、絵画、図表等を成可く効果的に応用して如実に一目は是れを知る一つの記念室であります。従而此の室に関する限り青淵翁一生の序次にならひ、経済以外の事項即ち教育、国際親善、労働問題、社会事業等凡てを網羅することになるのであります」。

そこにおける展示方針は「本室ニ於テハ青淵翁遺品写真其他ヲ用ヒ、模型絵図ゾオラマ図表等ヲ併用シ青淵翁ノ伝記ヲ可及的如実ニ且ツ簡易ニ展観シ一目ソノ一代ノ変化性多角性一貫性ヲ明瞭ナラシムルコト」というものであった。

混迷の今、経営学「マネジメントの父」、P.F.ドラッカーは、日本資本主義の父といわれる渋沢栄一を、「論語」をより所にして「道徳と経済」の一致を唱えた『倫理家』と称した。その「渋沢栄一の生涯とその事績」は、現在、渋沢史料館での展示を通して詳しく知ることができる。

“御所用品目録・御収蔵品目録”のすべて

「青淵翁 御所用品目録 御収蔵品目録」(「渋沢青淵先生手廻品目録 渋沢敬三子爵寄贈」、1946(昭和21)年12月28日)は、文部省史料館への寄贈時の目録である。記載の品々は168件に及び、そのうち165件を確認することができた。今回の企画展では、その記載順に、ありのままの遺品とお手回りの数々を展示した。

渋沢栄一日記

現存する栄一の日記は31冊あり、そのすべてが「渋沢栄一伝記資料」別巻第1、第2として刊行されている。31冊のうち、当館が所蔵する30冊以外は、渋沢栄一記念財団所蔵の日記(明治2年10月21日～11月19日)が1冊のみである。

「青淵」とは一遺愛の品々

青淵とは、栄一の雅号である。後に栄一自身、その名の由来について、「青淵と云ふ私の号は、私が十八歳頃、藍香先生から附けて貰った。当時私の家の下に淵があって、その関係から私の家を淵上小屋と名附けていた。それから青淵と云ふ号が出来たのである」と語った。藍香先生とは、日本の実業家で富岡製糸場の初代場長も勤めた、栄一が学問の師として仰いだ義兄尾高惇忠であった。

その青淵翁こと栄一の伝記資料編纂事業の発足にあたり、敬三は「もし私に無遠慮に小さな望を云わさして下さるならば、それは音出来上った、成功した多くの仕事の資料以外に、どんなに、不成功に終ったりまた無駄な努力がし続けられていたかということ、たといその例証が一つ一つ挙げられなくとも、そうしたものが極めて沢山あったであろうということを中心に、それらの事業を深く検討載きたい」と言い置いている。

モノづくりの「真の成功は失敗を率直にかつ科学的に究明した上で築かるべき」という視点を持ち合わせた人物であったからこそこの言葉である。

渋沢敬三の夢みた世界

敬三は、「資料を学界に紹介・提供すること、そのための努力をする研究者の仕事を援助する・実現すること」を標榜し、「理論づける前にすべてのものの実態を掴むことが大切」として、日本実業史博物館(当館資料)、保谷(現:西東京市)に民族学協会附属博物館を開設し、「アチックミュージアム」(国立民族学博物館資料)のコレクションにあたった。静岡県内浦で大川家文書(当館資料)を発見・整理し、のち『豆州内浦漁民史料』を刊行し、文部省史料館や水産資料館の設置を推進するなど、アーカイブズの保存にも尽力している。

1947(昭和22)年、戦後、希少な史料の散逸・破壊に拍車がかかる状況を憂慮し、史料の収集と保存公開機関設置の準備も始められた。その文部省による「史料館」の性格は、ある資料によれば、散逸の激しい近世以降の史料収集に重点をおくものの、将来は「古代より現代にいたるあらゆる史料」「考古学的遺物や民俗学的資料」、さらには「各官庁の文書類その他で学術的価値あるもの」などを対象とする、という構想が記されている。この時期に「各官庁の文書類」の保存に注意が払われている点は注目に値する。この史料館設立に尽力した敬三の夢の一端が垣間見える。

文部省史料館と日本実業史博物館

史料保存に対する全国的な関心の高まりをうけ、国立の史料保存機関の設置を求める声は研究者の間でも一段と高くなり、1949(昭和24)年3月、96名の学者の賛同を得て「史料館設置に関する請願」が第五通常国会の衆参両院に提出された。この請願書は社会経済史学会(野村兼太郎会長)が起草したもので、署名者には渋沢敬三はじめ小野武夫・辻善之助・野村兼太郎・上原専祿・大塚久雄・柳田国男・岩生成一各氏など、当時の主だった学者が並んだ。

請願は「日本の歴史資料は今正に空前の危機に臨んでいます」という言葉ではじまり、「文化国家の再建」のための「重要な礎石」として古文書記録等の民間史料を保存すべきこと、そのため「国立の史料保管機関(史料館)」を設けることを切々と訴えている。

その年の5月31日、「文部省設置法」が成立。第九条「大学学術局の事務」の中に「史料の蒐集、保存、及び利用に関する事務を処理すること」(第十六号)の一項が入れられた。これによって、史料保存の事業は、正式にスタートすることになった。

史料館と敬三 —“昭和の正倉院”に託して

1949(昭和24)年11月19日の施設披露の際の文部大臣挨拶において、「欧米の先進諸国におきましては、いずれも相当の規模を有する古文書館を経営し、そこに貴重な史料が安全に保管され、利用されているのに反しまして、わが国では私的の小規模な施設を除きまして、いままで(こ)のような施設がなかったということは、なんと申しても遺憾に堪えない」と述べ、「欧米諸国の古文書館に劣らない大規模な国立の史料館を建設してゆきたいと念願しております」と決意を語っている。

敗戦後の実博資料は戦禍を免れたが、竜門社資産の凍結・保管場所であった旧阪谷邸の占領軍による接収という事態に至った。渋沢青淵翁記念財団竜門社は、昭和26年に正式に発足した文部省史料館に収集資料の寄託を決定した。

文部省史料館の設立に奔走した敬三は、設立後の昭和27年から昭和38年の12年間、文部省史料館評議員を勤めた。敬三が没する前年の昭和37年9月、改めて寄贈の手続きがとられ、実博資料は、史料館の所蔵に帰した。まさにその当時の史料館収蔵庫は、アーカイブズ・ミュージアム・ライブラリー資料で埋め尽くされた“昭和の正倉院”であった。



日本実業史博物館準備室アーカイブズ

「実博」事業は1937(昭和12)年から始動するが、準備室が設置されたのは昭和14年末のことである。設置当初の構成員は、敬三の旧友小林輝次と元帝室博物館の遠藤武の2名である。終戦を迎えた1945(昭和20)年11月まで、基本的に両名が業務を行った。

準備室は設置当初、東京丸ノ内の第一銀行内に置かれていたが、1943(昭和18)年3月に小石川原町の旧阪谷邸(阪谷芳郎:元東京市長)に移転した。準備室の業務も移転を境に内容が変わっている。移転前の主な業務は、準備室設置以前に購入されたものも含めたコレクションの整理と、「実博」事業の資金を管理している竜門社との間での会計処理であった。コレクション購入自体は敬三の判断で行われており、準備室は敬三が購入を決定したコレクションの整理等を行った。旧阪谷邸への移転以降には、コレクション購入業務とともに、博物館の開館準備業務が比重を占める。

「準備室アーカイブズ」には、購入コレクションすべての整理・会計処理に関する文書、旧阪谷邸の維持管理に関する文書が多く含まれる点が大きな特徴となっている。博物館資料整理学の戦前史としても興味深い資料である。

祭魚洞の漁民資料への思い

渋沢敬三は、自らを「祭魚洞」と号した。この雅号は、鰯が捕らえた魚を川岸へ並べる習性を示す「鰯祭魚」という故事に因んだもので、食べもしない獲物を追い散らすその姿を、自身にぞらえたといわれる。

敬三は、大の釣り道楽であった。29歳のときに横浜の本牧で釣りの醍醐味を味わって以来、たびたび伊豆の静浦や内浦を訪れては、釣り三昧の日々を過ごした。1932(昭和7)年2月、祖父栄一死後の心身の静養のため内浦三津浜に滞在した敬三は、隣村長浜村の津元大川四郎左衛門と出会った。大川家の蔵や長屋門の中から大量の古文書が発見した敬三は、漁民生活の記録を後世へと伝え、学術研究に役立てる必要性を痛感し、各地の漁村の史料(祭魚洞文庫の水産史料)を収集するとともに、9年の歳月をかけて『豆州内浦漁民史料』全4冊を刊行した。

「原文書を整理して他日学者の用に供し得る形にすることが自分の目的」と記しているように、このときの敬三の視線は、アーカイブズを残し、活用するための土台を築くことに注がれていた。

